祝　辞

新入生の皆さん、そしてご家族の皆様、本日は誠におめでとうございます。また、このような歴史ある長崎総合科学大学の入学式に、お招きいただいたことを光栄に思います。黒川学長、学校関係者のみなさまに、深く感謝申し上げます。

さて、皆さんは今日、このキャンパスの門をくぐり、新しい物語の一ページ目を開きました。今の皆さんの胸にあるのは、希望でしょうか。それとも、これからの学業や生活に対する一抹の不安でしょうか。

私は四半世紀以上、ＩＴという変化の激しい業界で仕事をしてきました。そこで痛感しているのは、私が大学を卒業してからの約三十年間は、「教科書通りの正解」が通用しない日々だったということです。バブルの崩壊、就職氷河期、インターネットの爆発的な普及とネットバブル、リーマンショック以降の産業構造の変化、パンデミック、ＡＩの実用化、そしてコロナ禍以降は私ども氷河期世代のリストラなど、ジェットコースターのように聞こえるかもしれません。

特に昨今、ＡＩや関連するテクノロジーの進化は凄まじく、今日学んだ知識が明日には陳腐化しているかもしれない。予測不能かつ不確実な社会に、皆さんはこれから飛び出していくことになります。そんな時代を生き抜くために、私のこれまでの経験からみなさんに大事にしていただきたいこと。それは「諦めないこと」、そして「挑戦し続けること」です。「諦めない」とは、ただ頑固に同じことを繰り返すことではありません。科学の世界もビジネスの世界も、試行錯誤の連続です。一度の失敗で立ち止まるのではなく、「なぜ上手くいかなかったのか」というデータを取り入れたと捉え、次の打ち手を探し続けること。

これこそが、本当の意味での「諦めない強さ」であり、挑戦することの大切さではないでしょうか。大学生活の四年間で、ぜひ「上手くいかないこと」を恐れずに楽しんでください。そこでの試行錯誤こそが、皆さんを本物の技術者、本物の専門家へと成長させます。

私が勤めているエヌビディア（ＮＶＩＤＩＡ）の創業者でありＣＥＯ、ジェンスン・フアンは、二〇二四年三月に米国の大学での講演で、未来を担う学生たちに衝撃的な言葉を贈りました。

彼はこう言ったのです。

「私は皆さんに、十分な『痛みと苦しみ』を味わってほしいと願っています」

一見、突き放すような言葉に聞こえるかもしれません。しかし、彼が伝えたかった真意はこうです。

「偉大な成果を成し遂げるのは、高い知能指数（ＩＱ）ではない。人格が大きな成果をもたらし、人格は苦悩や苦境から育まれるもの。苦境に立たされたときに立ち上がる力、『レジリエンス（回復力）』こそが最も重要なのだ」と。

成功ばかりが約束された道では、この「折れない心」は育ちません。

思い通りにいかない実験、解けない数式、挫折しそうな瞬間。それらすべてが、皆さんの血肉となり、近い将来、社会という荒波を生き抜くための最強のエンジンになるのです。ここで、私自身の大好きな言葉をひとつ紹介させてください。「乾坤一擲（けんこんいってき）」という言葉です。

自分の運命をかけて、のるかそるかの大勝負に出ることを意味します。皆さんのこれからの人生には、大学生活においても、卒業後の社会人生活においても、ここぞという勝負所が必ずやってきます。誰も成し遂げていない研究テーマに挑むとき、自分の信じる新しい技術を世に問うとき、あるいは、全く新しい環境に身を投じるときそんな時、安全な道や安牌を選ぶのではなく、自分の可能性を信じて「乾坤一擲」の勝負ができる人間であってほしい。日頃から小さな挑戦と失敗を積み重ね、苦悩の中からレジリエンスを磨いてきた人だけが、ここ一番という場面で自分の運命を賭けた決断ができるのです。

長崎という地は、かつて多くの先人たちが荒波の向こう側に命

をかけて挑み、日本の近代化を切り拓いてきた場所です。
　そのＤＮＡは長崎総合科学大学にも、そして皆さんにも流れているはずです。失敗しても、誰かに笑われてもいい。何度でも挑戦し、何度でも「諦めない自分」に出会ってください。皆さんがこの長崎総合科学大学での日々を経て社会に出たのち、世界を驚かせるような「乾坤一擲」の勝負ができる大人へと成長されることを心から確信しています。
　皆さんの前途が、光り輝くものであることを祈念いたしまして、私からの祝辞とさせていただきます。
　本日は、本当におめでとうございます。

令和八年四月二日
エヌビディア合同会社
エンタープライズマーケティング本部
本部長　堀内　朗